多職種連携による骨粗鬆症予防に向けたセルフイメージ強化プログラムの構築

福録 恵子　●三重大学 大学院医学系研究科 看護学専攻 教授

骨粗鬆症予防プロジェクトメンバー／後列左より中村（管理栄養士）、森（薬剤師）、高見（理学療法士）医療法人富田浜病院　連携企業：湯元榊原館〈前列右〉前田諭人社長

1.背景と目的

人生100年時代を迎える中、日本では骨粗鬆症患者が1300万人存在し、うち200万人しか治療がなされていないと言われている。また、60歳代女性の20%が骨粗鬆症に罹患しているが自覚症状がないため、骨折によって骨密度の低下が判明することが多い。また中高年女性の9割以上は骨粗鬆症予防の意識はあるが、骨密度検診を受けたことがない者も多い。そのため、早期に骨粗鬆症患者やその予備軍に対して適切な治療や健康管理を行うことは、健康寿命延伸には必要不可欠である。

近年では二次骨折予防を目的に発足した骨粗鬆症リエゾンサービス（Osteoporosis Liaison Service: OLS）制度が普及し始めているが、活躍の場の多くは急性期病院であるのが現状である。OLSの主軸となる骨粗鬆症マネージャーは、社会に向けた啓発活動が重要な役割の一つとされているが、多職種チームによる地域在住者に対する骨粗鬆症予防活動は十分とは言えない。

そこで今回、大学や医療機関、企業が連携し、多職種からなるチームを構成し、参加者のセルフイメージの向上と骨粗鬆症予防行動の維持継続を目的とする講座を展開する。

2.取り組みの方法

本活動代表者は、高齢者を対象にフレイル予防を中心とした地域貢献活動に取り組んできた。しかし、骨粗鬆症予防行動に向けた参加者の意識の向上に関して、1回完結型プログラムの影響度を十分に把握することは難しいことが明らかとなった。

そこで今回、①骨・筋肉の働きと重要性、骨粗鬆症予防に関する知識（運動・栄養・薬）の提供②可視化可能な測定結果（体組成、骨量）の提供、③アンケート分析結果を基に、各医療専門職による3側面（運動･栄養･薬剤）からの骨粗鬆症予防アドバイス、④参加者交流による骨粗鬆症予防に関する意識、行動の共有からなる2回完結型プログラムを、より多くの参加者の関心が得られる温泉という場で実施し、その効果を検証する。

3.期待される成果

多職種連携による本活動は、地域住民が自身の健康について能動的に考え、骨粗鬆症予防行動を身につけることのできる仕掛けを多く取り入れている。今後、本活動の継続を通じて縦断的データを蓄積することは、地域社会でOLSを充実、発展させうるガイドラインのエビデンスとなることが期待できる。

また、本プロジェクトは医療専門職の連携に加え、大学、医療機関、地元企業が連携しており、今回の活動成果は、産学官それぞれの強みと役割を活かすことのできる骨粗鬆症予防活動モデルへ発展させることが期待できる。